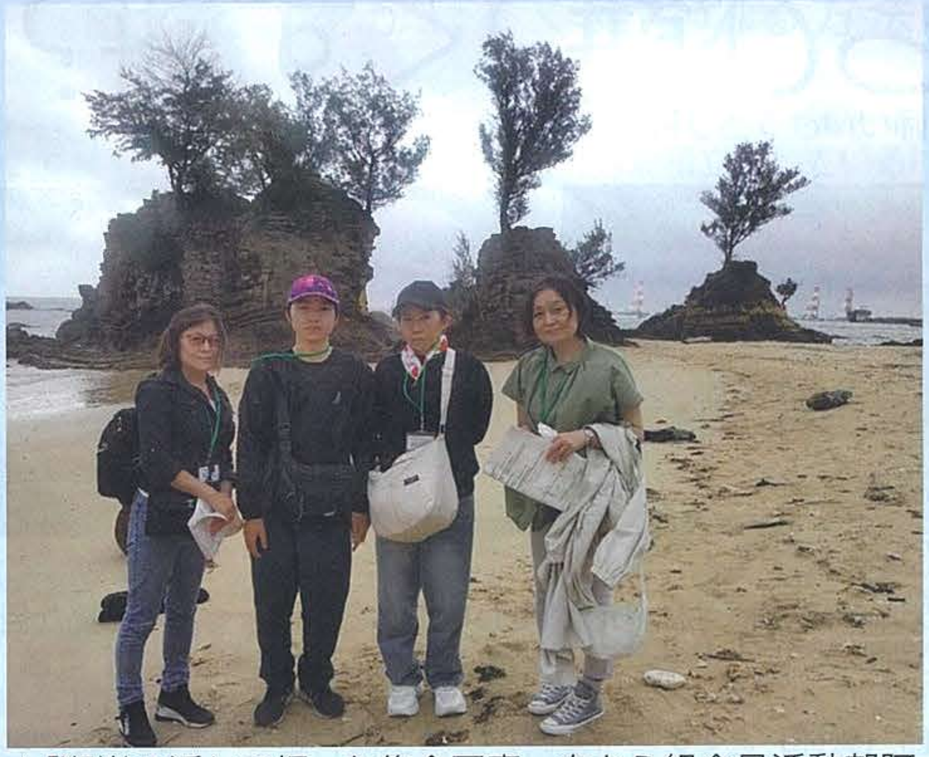
第42回ピースアクション.inオキナワ参加報告



▲「瀬嵩の浜」で撮った集合写真、左から組合員活動部阿部さん、参加頂いたコープあおもり組合員の葛西さん親子、松橋さんです。目の前で辺野古基地建設工事を行っているため右後ろにクレーンが見えます。
「瀬高の浜」がある大浦湾は、絶滅危惧種のジュゴンが生息していることや調査により新種の生物も見つかっており、工事による環境汚染の危惧もあります。

3月26日(水)～3月28日(金)に、沖縄県生協連と日本生協連が沖縄戦の実相と現在の沖縄が抱える基地問題を学び平和について考える機会として、毎年沖縄で、戦跡・基地をめぐる「ピースアクション.inオキナワ～第42回沖縄戦跡・基地めぐり～」を開催しています。コープあおもりからは、組合員とそのご家族3名、職員1名で参加してきました。今回は参加した3名に感想を書いていただきました。

葛西　なつきさんの感想

ピースアクション.inオキナワに参加し、沖縄戦を経験された方のお話を聞いたり、基地関連の講義を受けたり、辺野古基地の建設現場や、負傷兵が運び込まれたアブチラガマ、世界一危険な飛行場普天間基地が目の前に見える嘉数高台、平和祈念公園・資料館の見学など3日間多くのことを学びました。

中でも、一番印象に残ったのは、一日目の、那覇青少年舞台プログラムの皆さんによる、沖縄戦（対馬丸）を題材にした演劇です。

正直、最初は、おゆうぎ会の延長のようなものだろうと思っていましたが、全く違いました。

華麗な舞踏から始まり、激しい戦いや対馬丸の悲しい事故、未来へ伝えようとする熱い想いが伝わってくる熱演で、大変感動しました。

子どもたちの身近に沖縄戦や基地問題があり、子どもたちなりに理解し、伝えようという姿がとても頼もしかったです。

平和が当たり前になって平和ボケしている現代ですが、悲しみや苦しみがあったことは絶対に忘れてはならないと思いました。

私も、身近な人に話したり、SNSに投稿したり、平和について少しでもシェアできたらよいなと思います。

この度は、参加させていただきありがとうございました。

演劇の様子

平和の礎

葛西　太樹さんの感想

私は沖縄・基地めぐりに参加して心に残ったことがいくつかあります。

一つ目は、玉木利枝子さんのお話です。その中でも、一番恐ろしいと思ったのは、手榴弾を武器として使うのではなく、敵軍の捕虜にならないための自爆として使っていたということです。目の前で知人や家族を失ってしまい、精神的に追いつめられてしまった人もたくさんいたと思いました。玉木さんの話を聞いて私は改めて、戦争は絶対に起こってはいけないものだと思いました。

二つ目は、糸数壕です。入り口がせまく、中もせまいのかと思ったら、意外と広くて驚きました。中には負傷者の寝るベッドや井戸、トイレなどがありましたが、そんなに清潔ではなく、当時は感染症やけがの対策などが大変だったのだと見受けられました。話を聞くと、六百人以上の負傷者がこのガマにいたと言っていたので、さらに大変だったと思いました。ガマの中で亡くなった人もたくさんいるので、当時の悲惨さをすごく感じました。

平和祈念資料館

さいごは、平和祈念資料館です。資料館の展示室に行き、最初に感じたのは怖さです。飛行機が次々と爆弾を落としていく映像はものすごく恐ろしかったです。当時の状況が写された写真には、言葉では表せないほどの悲惨な写真がありました。銃殺された軍人や、焼かれてしまった人など、見ていられませんでした。しかし、戦争の悲惨さを知ることで、平和の大切さを理解することができると思います。

この経験からぼくは、戦争の悲惨さを忘れずに、二度と繰り返さないために、平和な社会の実現に向けて行動していきたいと思います。

ピースアクションinオキナワ特設サイト二次元バーコード

学び　語り継ぐ　松橋　久美子さん

3月26日・80年前　島丸ごとが、本土の人身護供となるべく、ありったけの地獄を集めた地上戦に巻き込まれた日に、第42回ピースアクション沖縄参加の為、甚災級豪雪の名残りの雪山を眼下に、空路、那覇へ。

ホテル到着後早速に、レセプション関連、その後、戦時下10歳の玉木利枝子さんの体験談を拝聴。

日本軍のあるまじき暴挙・愚業。嗚咽と共に語る、家族・友の死。何より、はぐれていた祖父に巡り会えた時の「自分が一緒だったら誰も死なせはしなかった!!」の言葉に「あれはウソ。一緒にいたら3日目までには殺されていた」と冷めた声で吐き捨てた、90歳の玉木さんに、戦争の不条理を見た。

又、沖縄国際大学 前泊教授の戦争は、犠牲になる国民と、犠牲にする国民がいる。

玉木利枝子さん

〝今は戦後ではなく、戦前の様相。今回の講話すら、秘密保護法を基に逮捕されかねない。その時は会場の皆さんも同罪ですよ。〟に在日米軍基地面積70％を背負い、日米地位協定で理不尽に虐げられ続ける沖縄の惨状を窺い知る。

2日目、辺野古埋め立地見学から3日目、魂魄の塔への献花まで、ガイドの語りや、平和記念資料館の手記や写真へと歩みを進めるにつれ、確かに米軍の鉄の暴風と形容された程の攻撃の前に、多数の犠牲者は出たが、それ以上に、沖縄戦は日本軍による琉球人へのジェノサイドではとの思いが、頭をもたげ、離れなくなった。

住民をスパイ視しての拷問・虐殺、壕からの追い出し、米軍に探知されない為の乳幼児の殺害、家族への殺害強唆。

「生きて虜因の辱めを受けず」と言う軍人への訓令である戦陣訓を民間人にも徹底したため、軍から手榴弾を渡されての集団自決、弾の不発によっては、家族同士、知人同士の殺し合いetc。

軍官民共生共死を、島民に強いて命を掛けて国体（天皇）を守れと沖縄を捨て石にして来た事実。

これがジェノサイドではなくて何だと言うのだろうか？

残念ながら、今の日本の授業では太平洋戦争について、時間を費やす事はほぼ無い。それ所か悲しいかな、歴史を歪曲し、修正し、美化しようとまでしている。

政府は、辺野古新基地埋め立てに、沖縄戦犠牲者の遺骨が眠る土砂を使おうとまでしていた。沖縄を本土の盾にして来た政権は、現代では、曖昧な法解釈を盾に、沖縄を踏みつけ続けている。

だからこそ、学び、語り継がなければならない。犠牲になった方々の遺志に思いをはせ、平和のために、学び、語り継ぐ。

糸数アブチラガマにて

呻吟（しんぎん）で
ていだ（太陽）をとせがむ
蝿蛆（ようそ）の君へ
毒を手向ける　威圧の闇

亡き人に　報いるがごと
語り継ぐ　碧き島での